

## 外力が短い時間だけ作用する時の梁の振動に就て

正員 田 中 清\*

**要旨:** 梁に短時間だけ急激な外力が作用する場合、作用時間が短い程その衝撃効果が減少し、最大撓みは外力が去つた後に起ることの説明である。

**本文:** 長さ  $l$  なる単純梁に外力  $P$  が梁の  $x=\xi$  の點に、時間  $t=0$  から  $t=\tau$  までの  $\tau$  時間だけ作用するものとする。この時の梁の振動方程式は、

$0 < t \leq \tau$  (強制振動) の時

$$EI \frac{\partial^4 \eta}{\partial x^4} + \frac{wA}{g} \frac{\partial^2 \eta}{\partial t^2} = P \dots\dots\dots (1)$$

$t \geq \tau$  (自由振動) の時

$$EI \frac{\partial^4 \eta}{\partial x^4} + \frac{wA}{g} \frac{\partial^2 \eta}{\partial t^2} = 0 \dots\dots\dots (2)$$

こゝに  $\eta$  は梁の撓み (外力作用中の撓みを  $\eta_1$ , 外力が去つた後の撓みを  $\eta_2$  と區別する。)  $EI$  は梁の曲げ剛さ  $w/g$  は梁の單位重量。  $A$  は梁の斷面積。

単純梁の時の境界條件は  $x=0$  及び  $x=l$  にて  $\eta=0$  及び  $\partial^2 \eta / \partial x^2 = 0$ , 初期條件は  $t=0$  の時  $\eta_1=0$  及び  $\partial \eta_1 / \partial t = 0$ ,  $t=\tau$  の時  $\eta_1 = \eta_2$  及び  $\partial \eta_1 / \partial t = \partial \eta_2 / \partial t$  である。

境界條件より  $\eta$  は  $x$  の奇函數として展開され、

$$\eta = \sum_{n=1}^{\infty} \varphi_n(t) \sin \frac{n\pi x}{l}, \quad (n=1, 2, 3, \dots) \dots\dots\dots (3)$$

$\eta$  に應じて  $P$  を展開すれば、  $P$  は  $x=\xi$  のみに作用する故、

$$P = \frac{2P}{l} \sum_{n=1}^{\infty} \sin \frac{n\pi \xi}{l} \sin \frac{n\pi x}{l}, \quad (n=1, 2, 3, \dots) \dots\dots\dots (4)$$

方程式 (1) 及び (2) の兩邊に  $\sin n\pi x/l$  を乗じて  $0 \sim l$  間に積分し、部分積分を行つて境界條件を入れると、

$$\left. \begin{aligned} (1) \text{ 式は} \\ EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4 \varphi_n + \frac{wA}{g} \frac{d^2 \varphi_n}{dt^2} = \frac{2P}{l} \sin \frac{n\pi \xi}{l} \\ (2) \text{ 式は} \\ EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4 \varphi_n + \frac{wA}{g} \frac{d^2 \varphi_n}{dt^2} = 0 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (5)$$

(註  $\int_0^l \sin \frac{m\pi x}{l} \sin \frac{n\pi x}{l} dx = \begin{cases} 0 \dots\dots (m \neq n) \\ l/2 \dots (m=n) \end{cases}$  を用ひる。)

自由振動の基本週期を  $T_0$  とすれば、

$$T_0 = \frac{2\pi}{\pi^2 \sqrt{\frac{gEI}{wA}}} = \frac{2l^2}{\pi} \sqrt{\frac{wA}{gEI}} \dots\dots\dots (6)$$

(5) の解は

$$\begin{aligned} \varphi_n = A_1 \sin \frac{2\pi n^2}{T_0} t + B_1 \cos \frac{2\pi n^2}{T_0} t \\ + \frac{2P}{l} \sin \frac{n\pi \xi}{l} \frac{1}{EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4} \dots\dots\dots (7) \end{aligned}$$

及び

$$\varphi_n = A_2 \sin \frac{2\pi n^2}{T_0} t + B_2 \cos \frac{2\pi n^2}{T_0} t \dots\dots\dots (8)$$

$t=0$  の初期條件より、

$$A_1 = 0, \quad B_1 = - \frac{\frac{2P}{l} \sin \frac{n\pi \xi}{l}}{EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4}$$

$t=\tau$  の時 (7), (8) の  $\varphi_n, \partial \varphi_n / \partial t$  が連続となる條件より

$$\begin{aligned} A_2 = \frac{\frac{2P}{l} \sin \frac{n\pi \xi}{l}}{EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4} \sin \frac{2\pi n^2}{T_0} \tau \\ B_2 = \frac{\frac{2P}{l} \sin \frac{n\pi \xi}{l}}{EI \left( \frac{n\pi}{l} \right)^4} \left( \cos \frac{2\pi n^2}{T_0} \tau - 1 \right) \end{aligned}$$

故に所要の解は

$0 < t \leq \tau$  の時

$$\eta_1 = \frac{4Pl^3}{\pi^4 EI} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^4} \left( \sin \frac{\pi n^2 t}{T_0} \right)^2 \sin \frac{n\pi \xi}{l} \sin \frac{n\pi x}{l} \dots\dots\dots (9)$$

$t \geq \tau$  の時

$$\begin{aligned} \eta_2 = \frac{4Pl^3}{\pi^4 EI} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^4} \sin \frac{\pi n^2 \tau}{T_0} \sin \frac{\pi n^2 (2t-\tau)}{T_0} \\ \sin \frac{n\pi \xi}{l} \sin \frac{n\pi x}{l} \dots\dots\dots (10) \end{aligned}$$

\* 東京大學第一工學部土木工學教室

$P$  が静止荷重の時の静的撓みを  $\eta_0$  とすれば, (9) 式中の時間に無関係な項のみを取り,

$$\eta_0 = \frac{2Pb^3}{\pi^4 EI} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^4} \sin \frac{n\pi\xi}{l} \sin \frac{n\pi x}{l} \dots\dots\dots (11)$$

外力  $P$  が梁の中央  $\xi=l/2$  に作用する時,  $n=1$  の第 1 項のみを取れば誤差は約 2.5% である。この場合には,  $0 < t \leq \tau$  の時,

$$\eta_1 = 2 \left( \sin \frac{\pi t}{T_0} \right)^2 \cdot \eta_0 \dots\dots\dots (12)$$

$t \geq \tau$  の時,

$$\eta_2 = 2 \left( \sin \frac{\pi\tau}{T_0} \sin \frac{\pi(2t-\tau)}{T_0} \right) \cdot \eta_0 \dots\dots\dots (13)$$

(12), (13) 式によつて, 外力の作用時間  $\tau$  と梁の自由振動の週期  $T_0$  との関係より次の結果を得る。

(I)  $\tau \geq 1/2 T_0$  ならば  $t=1/2 T_0$  の時  $\eta_{max.} = 2\eta_0$ , 急激な外力による撓みが静止荷重による撓みの 2 倍となるためには外力の作用時間が自由振動週期の 1/2 以上なることを要する。

(II)  $\tau < 1/2 T_0$  ならば,

$$0 < t \leq \tau \text{ では } t=\tau \text{ の時 } \eta_{1max.} = 2 \left( \sin \frac{\pi\tau}{T_0} \right)^2 \cdot \eta_0$$

$$t > \tau \text{ では } t = \frac{\tau}{2} + \frac{T_0}{4} \text{ の時 } \eta_{2max.} = 2 \sin \frac{\pi\tau}{T_0} \cdot \eta_0$$

$$\eta_{2max.} > \eta_{1max.}$$

即ち外力の作用時間が自由振動週期の 1/2 より短い時には, 最大撓みは外力が去つた後  $(T_0/4 - \tau/2)$  時間後に起る。その最大撓みは静止撓みの 2 倍より小である。

(III) 更に  $\tau < \frac{1}{4} T_0$  ならば  $\left( \sin \frac{\pi\tau}{T_0} \right)^2 < \frac{1}{2}$ ,  $\tau < \frac{1}{6} T_0$  ならば  $\sin \frac{\pi\tau}{T_0} < \frac{1}{2}$  であるから,  $\tau$  と  $T_0$  との関係によつて下の如き関係が得られる。

1.  $\tau \geq 1/2 T_0$  の時  $\eta_{2max.} = \eta_{1max.} = 2\eta_0$
2.  $1/2 T_0 > \tau > 1/4 T_0$  の時  $2\eta_0 > \eta_{2max.} > \eta_{1max.} > \eta_0$
3.  $1/4 T_0 > \tau > 1/6 T_0$  の時  $2\eta_0 > \eta_{2max.} > \eta_0 > \eta_{1max.}$

4.  $\tau < 1/6 T_0$  の時  $\eta_0 > \eta_{2max.} > \eta_{1max.}$

外力の作用時間が自由振動週期の 1/6 より短い時にはその最大撓みは静的撓みより小となる。

(IV) 丁度  $\tau = mT_0$  (但し  $m=1, 2, 3, \dots$ ) ならば  $\eta_2 = 0$  となり外力が去つた後に, 梁には殆ど振動が残らない。

(V) 亂暴ではあるが梁の破壊限度が弾性撓みによるものと假定すれば, 静止荷重  $P$  に於て丁度破壊限度にある梁に  $\mu P$  (但し  $\mu > 1$ ) なる外力の作用し得る時間の限度は,

外力の作用中に破壊せぬための限度

$$\tau_1 < \frac{T_0}{\pi} \sin^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\mu}}$$

外力の去つた後にも破壊せぬための限度

$$\tau_2 < \frac{T_0}{\pi} \sin^{-1} \frac{1}{2\mu}$$

$\mu$	$\tau_1$	$\tau_2$
1	$0.250 T_0$	$0.167 T_0$
1.5	$0.196 T_0$	$0.108 T_0$
2	$0.166 T_0$	$0.081 T_0$
5	$0.102 T_0$	$0.032 T_0$
10	$0.072 T_0$	$0.016 T_0$
100	$0.022 T_0$	$0.0016 T_0$

附記: (1)  $P$  を外力の代りに荷重とすれば,  $P/g$   $\partial^2 \eta / \partial t^2$  の項を附加する必要がある,  $P/g$  が  $wA/g$  に比して餘り大でない場合には振幅には影響が無いが, 強制振動の週期が變化する。 $P/g$  が  $wA/g$  に比して著しく大なる場合には全く異なる現象が現れる。

(2) 外力の作用時間が  $1/100 \sim 1/1000$  sec 程度以下となれば, 上の議論は適用出来ない。この場合にはより根本的な弾性波動の傳播を考慮する必要がある。以上 (昭 22. 8. 21 受付)